

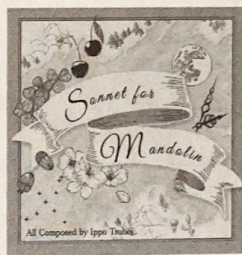
那須田務 ● Tsumotomu Nasuda

準 作曲家壺井一步のマンダリン作品集。2枚のディスク

にマンダリンのソロ、マンダリンとピアノ、マンダリンとギター、マンダリン五重奏、マンダリン・オーケストラというように、マンダリンの様々な形態の音楽を収録。といっても、各曲は《さくら》《早春賦》《花》《荒城の月》などの既存の名歌の旋律を用い、そこに壺井自身の音を盛り込んで独自のサウンドを作っている。完全なオリジナル作品は《ソネット》第6番とポーナス・トラックの音楽物語《銀河鉄道の夜》からの5曲。マンダリンのソロはマンダリン・オーケストラのコンサートマスターでもある望月豪。独奏曲の《さくら》はトレモロの序奏に始まる、まさに初期バロックの器楽曲のトゥッカータ風。マンダリンの音色はどこか日本の箏や琵琶を想起させるが、曲自体は多声の西洋風。マンダリンは撥弦楽器、ピアノは有弦打楽器。音色の異なる二つの「点」の絡み合う様子が美しい。《荒城の月》はピアノの独特な和声にマンダリンのトレモロの織りなす不思議な響きが新鮮。というように編曲が大胆で個性的。硬質なマンダリンとまろやかなギターの音色の組み合わせによるフランス音楽も洒落た味わい。マンダリン五重奏曲は《アメイズング・グレイス》等アメリカの音楽。この楽器特有のトレモロが原曲の情感を引き立てる。大編成のマンダリン・オーケストラはさざ波のようなトレモロのクレッシェンドなどのア

鈴木 裕 ● Yutaka Suzuki

【録音評】 主役であるマンダリンには俊敏な立ち上がり、要素があり、この楽器の音色感はよく捉えられている。ピアノとデュオではピアノが大きすぎ、ギターとのデュオではマンダリンはなぜか左の手前にいるという音場感。マンダリン・オーケストラとの合奏では音楽的な音量バランスに疑問を感じさせ。収録は横濱みなとみらいホールの小ホールにて。 (91)



■壺井一步／マンダリンのためのソネット

〔全7曲〕
(詳細は巻末新譜一覧表参照)
望月豪(mand) 鷹羽弘晃(p,指揮)
山田岳(g) 町田一人(マンダラ・テノール) 堀雅貴(マンダロンチェロ) ソネットプロジェクト・マンダリン・オーケストラ、加藤雄太(cb) 萩原雅子(S)
[ART N'ART©AACD102(2枚組)]
¥3850

濱田川務 ● Mitsuhiko Hamada

準 ギターのための作、編曲その他ではこのところかなり

の活躍ぶりである壺井一步が、マンダリンに寄せた楽曲の数々。しかしこれにはかなりの歴史があり作曲の壺井一步とマンダリン奏者の望月豪によるプロジェクトは2012年にスタートしてなおいまに続くそうである。なるほど2枚組のCD登場で、この楽器の響きが好きなむきには好ましい存在となりそうである。マンダリンのみの演奏から、ピアノが加わったもの、ギターが入ったもの、そしてマンダリン五重奏、マンダリン・オーケストラのための作品とひろがっている。《ソネット》第1番から5番までは「誰もが知っている、広く聴かれてきた曲を用いた作品」であり、日本の歌からはじまるが次第に変形し、作曲家壺井一步の独壇場となつてゆく。楽曲もシャンソンあり、またアメリカにとびフォスターあり、何ありとにぎやかに発展する。しかしなかなか変化に富み、マンダラ四重奏など洗った響きのアイルランド民謡もあり、老若男女すべての耳に、新しいだけではないなつかし味のある音楽をとどける。《ソネット》第6番からは、なつかしのメロディをはなれて壺井の作曲によるものとなるが、当CDの演奏者たちはまことに多彩。先に名前をあげたふたりのほか、ピアノ・指揮の鷹羽弘晃、ギター界の精鋭山田岳、以下マンダリン、マンダロンチェロ、コントラバスもある。作曲、編曲の壺井の「個展会場」に出席する気分。ソプラノの萩原雅子の存在もあった。